

平成二十一年三月一日発行 第十九卷第三号 通巻第二二二号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成21年3月号

岡井省二創刊



矜恃

高橋将夫

枯野とは歩き続けるところなり
来なければ来ないで淋し寒鴉
時計屋の時刻ばらばら冬銀河
談論も煮詰まつてゐる鯨鍋

冬の蝶鬼と知らずについて行く
蓮根掘引くに引けなくなつてをる
安住の星見当たらず冬銀河
行く末の見えてきたりし懐手
次の世のあると思へば冬ぬくし
湯豆腐に芯あり石に心あり
葉牡丹の中央にある矜持かな

槐安集

水野恒彦

歌垣の山の音きく十二月
碑熊野道に枯野のひかり殺到す
冬銀河からの船影かもしれず
わが血より濃くれたとへば寒椿
大寒の星屑となり父の骨

延広禎一

鼻いつも顔のまん中屠蘇の酔
ルービックキューブを回すちやんちやんこ
開かひきよ経うげ偈を唱へてをりぬ初日ノ出
生かさされて百味百寿のおせちかな
猩々や独楽の心棒ゆるぎなし



加藤みき

若水や苔の匂ひの漂うて
裸木の梢に志のあり
いつのまにか連れのうてをり冬の山
海髪のゆらぎに真砂冬泉
短日や陳皮のあがり上上に

石脇みはる

夕風の寒潮力あふれたる
葱蕪大根揃ひ去年今年
臘八や米糠三升持つて来て
とにかくに暖炉の前に集まりし
鱸酒や大言壮語してゐたる

中島陽華

獅子柚子の庭の明るさ屋敷神
立ち止まり鱗鱗の声聞く小春かな
二度洗ひせし身体にて冬至粥
解体のはかどり桜紅葉かな
大綿や遺品は三味線一丁よ

竹内悦子

石落咲くや師のおもかげと猫の髭
これほどの落葉地球に色添えて
トランプに裏と表や冬銀河
寒卵いのちの限り立ちにけり
三室戸寺の牛がもの言ふお元日

栗栖恵通子

伊勢海老の鎧・兜を脱ぎ散らす
鴨川が加茂と変はりし雪催
世之介の舳先に見ゆる宝船
嫁ヶ君岩戸に隙のありにけり
大根の音なく煮ゆる三和土かな

大島翠木

叡山やいましも消ゆる毛糸帽
じゆうぶんに冬虹またぐ横川かな
菰巻きの自然薯ひらく雪もよひ
振りむくや師走満月床屋の死
ギヤラリーへ茶色い靴で山眠る

雨村敏子

鏡餅つひの栖のまん中に
初酒や三宝にある丸い穴
年の酒提げ大海神の命
空赫き韃靼海峡寒の雁
藻塩壺ぼんとふたつに寒卵

小形さとる

浮橋に鴨を寄せてや御講風
大歳やうらかなれば浜に出て
くれなゐの額の阿字も初明り
忌宮に鶏のあつまる雪催ひ
練ねりぎぬの月にはあれど空つ風

本多俊子

八つ手咲く師の深きこゑ星のこゑ
人じん襖かんや冬星の音響きあふる
雪嶺を見るカーテンを畳みたり
雪女金の指輪を探しをり
恋ひとつ結氷へ閉ぢ去りにけり

久津見風牛

干し大根下ろし終りの虚空かな
鳩もぐるだけ見てすぐに帰りけり
張替への障子ふくらむ日射しかな
山茶花の燈明なるべし観世音
念佛の自然に口から鳩の里

近藤 きくえ

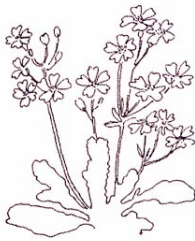
微笑みの木喰佛や冬木の芽
冬霧に山なみ動くごとくなり
彩きはめ大地にかへる落葉かな
あさぼらけ勤行のこゑ冴えわたる
ゑり善をいでて大路のしぐれかな

近藤 喜子

青き森の匂ひ放てる聖樹かな
冬ぬくし鼻ふたつあるピカソの絵
狼の声うしなひし木霊かな
狐火や我がうちに揺れ止まぬもの
清書してゐる寒林の静けさに

谷村 幸子

冬ざくらは後生大事に蕪村の忌
白川石冬の木財の濃くありぬ
冬麗の省一の句碑と差しむかひ
大淀の流れ流るる芦枯れて
手を合わす善財童子青木の实



槐市集

谷口東峰遺墨集

中田禎子

青墨の点の滲みや長元坊
をの子らむ真向ひの子の冬帽子
日向ぼこ背中合せの夫婦かな
自転車の籠に大根とフランスパン
小雨降る終弘法塔黒し

中野京子

綿雲のゆつくり流れ冬すみれ
さそはれてさそつてあたり小六月
茶柱にほつと息ぬく十二月
裸木の枝の間の空近し
枯はちす天衣無縫の風の形

中道愛子

阿弥陀堂湯気のなかなる大根焚
息白し少年肩をいからせて
虫喰の葉の二三枚枯芙蓉
だしぬけに出合ひし馳あわてけり
わが影の長々伸びし冬日かな

西村純太

小春日や駱駝が通る針の孔
孤となりて独となりたる海鼠かな
若狭にて氷柱折るとき星の消ゆ
冬空やピカソの青のありどころ
狐火や青き雨降る未生かな



槐集

高橋将夫選

枯れ尽きしもの芳しき朝かな
枚方 富松 寛子

うごくもの動かざるもの冬の川
マスクして漢も女もなかりけり
わが胸の白き影より雪蛭

落葉道如意樹探してをりにけり
柩を挽く冬のルーブル人いきれ
まつさらに時雨の洗ふオペラ街
奈良 瀬川 公馨

巴里つ子の鱈三昧の暮らしかな
ひやひやとマジックアワー始まり
冬帽子仁王立ちせるメトロかな
マジックアワーはバラ色の広が多眠え

岡崎 松原 伸子

手を触れしのみのカトレアまぼろしか
シリウスに射止められたる山の神
短日のはやばや届く新刊書
うすうすと届く日射しや降誕祭

バロツクとロココの競ふ十二月
岡崎 岩月優美子

冬銀河流れ去るもの留まるもの
ピツコロを飛び出して来し冬の星
ひとすじの水音残し山眠る

真実を突くふくろふの眼かな
木守柿順に啄み淡き空
枚方 中野 京子

枇杷咲いて流れともなき流れかな
日向ぼこ話のずれて重なりて
彩りをつまみ干菓子の落葉かな
極月の切り岸に立ち竹とんぼ

京都 竹中 一花

追ひつけぬ父の背中や冬の雲
輪島塗りの椀に風たつ鯰起し
箆に揚ぐ氷魚躍りし湖北かな
洗ひたる障子の骨を貫く朝日
肋骨に当る潮風冬兆す

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

枯れ尽きしもの芳しき朝かな 富松 寛子
枯れ尽くした景に美しさやぬくもりを見る句はあるが、芳しさと朝のすがすがしさを詠んだ句は他になかろう。〈落葉道如意樹探してをりにけり 寛子〉…如意樹はどこかにきつとあると信じたい。

まつさらに時雨の洗ふオペラ街 瀬川 公馨
雨に洗われてオペラ街がまつさらにのようにきれいになったという。その雨が冷たくてうつつとうしい時雨であるのが味噌。日本と西洋の古典がほどよく取り合わされた和洋折衷の一句。

手を触れしのみのカトレアまぼろしか 松原 仲子
カトレアには触れただけで、その先はなかつたとのこと。カトレアは数多い洋蘭のなかでも、最も艶麗、豪華。私なら触れただけでも幸せといったところ。今となれば、全て夢まぼろしの世界。

ピッコロを飛び出して来し冬の星 岩月優美子
笛から星が飛び出すわけがないが、ピッコロのリズミカルな音色を思うと、なんだかそんな気もしてくる。不思議と納得させられる一句である。

日向ぼこ話をのずれて重なりて 中野 京子
日向ぼっこをしなから、とりとめもない話をしているのであろう。

時には話がずれてかみ合わなかったり、前の話と重複したりして。それにしても、日向ぼっここの会話の描き方が実にユニーク。

追ひつけぬ父の背中や冬の雲 竹中 一花
子は親の背中を見て育つという。子にとつて親はいつまでたつても親。冬の雲をみていてふと父の背中を思い出したのであろうか。追いかけても、追いかけても追いつけない亡き父の夢…ふとそんな景が浮かんだ。

海千の玉山千の玉せせる 柳川 晋
玉せせりは箱崎の宮崎宮と玉取恵比寿神社の神事。海水で身を清めた禪一丁の若者たちが群がって玉を取り合うさまは勇壮。この玉せせり、なかなか思い通りにことが運ばない。きつと、海千山千を相手にする思いで玉をせせているのであろう。

ペリペリと乾ぶ裏白向き正す 近藤 紀子
裏白が乾くさまはまさにペリペリ。その乾いた裏白が気になつて、何度も向きを正そうとすることが作者の作者たる所以。作者の人の柄である。

千里来し白鳥の頸たをやかに 谷岡 尚美
白鳥のしなやかな頸をみて、白鳥がはるばる渡ってきた千里のかなたに思いをはせる作者の感性に共感する。千里を渡ってきた強さがこのたおやかさなのだ。

寒風の町にチルチルミチルかな 中田 禎子
寒風の町に幸せの青い鳥を探すチルチルとミチル。寒風が厳しい今の世を思わせる。
(以下略)